

【個人研究】

大学生における空耳体験の頻度についての調査 - 幻聴、難聴、聞き間違いの関係性 -

岡 田 齊*

Auditory Hallucination and Mishearing (SORAMIMI) in University Students: Relationships Between Auditory Hallucination, Subjective Hearing Loss, and Mishearing.

Hitoshi OKADA

This study aims to develop an abridged version of the Auditory Hallucination and Mishearing Questionnaire (SORAMIMI Questionnaire). The abridged version is designed to be used as a quick tool for the assessment of auditory hallucination, mishearing and subjective hearing loss. Data from 469 university students were used to analyze the item statistics and psychometric properties. Twenty-four items with an optimal combination of high item-total correlations and reliability in assessing changes were selected for the SORAMIMI Questionnaire.

Key words : auditory hallucination, tinnitus, hearing loss

「夕つかた夜など、しのびたる郭公の遠う空みみかとおぼゆるまでたどどしきを、聞きつけたらん。」(枕草子) このように音がないのに音が聞こえたように感じる体験や、聞こえているのに聞かないふりをする現象は古くから「空耳」と呼ばれよく知られてきた(小学館日本語大辞典)。後者の表現は近代には用いられなくなったようだが、前者は現在も日常的によく用いられる。

では、心理学ではこのような現象をどのように扱ってきたのであろうか。音源が存在しないにもかかわらず音が知覚される現象は、

主体の関わり方によって自発的に聞こうとして聞こえる場合と、意図はなくても聞こえてしまう場合の二つに分けることができよう。前者には教示により喚起された聴覚的なイメージがあり、心理学的観点からの研究は、それほど多くはないものの着実に知見が蓄積しつつある(例えばReisberg, 1992; 菱谷, 2001)。後者には、幻聴、耳鳴り、聞き間違い(本報告ではこれを空耳と呼ぶ)を挙げることができる。

幻聴については統合失調症を中心として数多くの研究がなされてきた(例えばアサード, 1990)。幻聴の中でも声が聞こえるという幻声は統合失調症を鑑別する際に重要な指

*おかだ ひとし 文教大学人間科学部臨床心理学科

標となっているが、これは必ずしも病理群だけに体験されるものではないことが健常者を対象とした研究により明らかにされてきた。非病理群の幻聴については大学生を対象とした調査によると37～39%が体験している現象であり (Barrett & Etheridge, 1992; Posey & Losch, 1983)。これらの体験は病理とは無関係であることが知られている。一般の人への幻覚的体験に関する調査の結果では10～25%の人がシュナイダーの1級症状に該当する「自分の考えが大きな声で聞こえた」という体験が少なくとも1回はあり (Slade & Bentall, 1988)、定期的に体験している人は4～5%はいるという (Tien, 1991)。Morrison, Wells & Northard (2000)は、これらの調査結果から考えると幻聴は病理群に限らず誰にでも起こる日常的現象であると指摘している。病理群の報告する幻聴と健常者の幻声は音量や明瞭さや頻度については差異はないが、前者は否定的に後者は必ずしも否定的ではないというむしろ認知の仕方に違いがあることが知られており、この部分の変容に着目した認知行動療法が考案され成果を挙げつつある。

幻聴の研究は主として幻声について行われているが、幻聴は幻声だけではない。非言語性の幻聴として雑音や物音、音楽などの幻聴も知られている (例えばアサード, 1990)。この中でも音楽の幻聴については幻声ほどではないが、最近関心が高まりつつある。Hermesh, Konas, Shiloh, Dar, Marom, Weizman & Gross-Isseroff (2004) は音楽の幻聴について精神病理群では強迫神経症の患者に顕著であり、統合失調症では3%であるのに対して強迫神経症ではその比率は30%にも達し、強迫神経症の症状のひとつとして重要であると指摘している。そして、その機制については従来は聴力損失や聾と関連すること、特に女性に多く、加齢とも関連することから中枢神経系の障害も関連するのではないかと言われてきた (Hermesh, et al., 2004)。加えて社会的孤立も要因となるという指摘も

ある (Berrios, 1990)。音楽性の幻聴の発生については3つの仮説がある (Ali, 2002)。ひとつは興奮理論と言われる。Hughlings-Jacksonが指摘している「精神性の」発作により関連する神経回路が刺激されることで記憶されていた音楽経験が再体験されるとする説である (Miller & Crossby, 1979)。もうひとつは解発理論である。この理論は、感覚刺激は先に貯蔵された記憶のうち大多数の無関連な情報を抑制するという考え方に基づく。感覚入力が減衰すると知覚に依存する回路が脱抑制状態となり先に記憶された痕跡が再体験されるようになる (Miller & Crossby, 1979)。3つ目に「寄生記憶理論」がある (Keshavan, David, Striengel & Lishman, 1992)。この理論によればある種の記憶については学習はされずに、記憶貯蔵庫の中で固定化した独自の存在としてあり続け、定期的に再体験されるという説である。最近では詳しい機制は十分に解明されていないものの、音楽性の幻聴が現れているときに右半球の大脳皮質の聴覚野が異常な興奮を示しているという報告は少ないことから音楽性の幻聴は中枢神経系の異常というよりも、末梢神経系の過剰な活動の結果であり、リズムカルな耳鳴りから発展したのではないかと考えられるようになってきている (Hermesh, et al., 2004)。

耳鳴は難聴とともに医学的に扱われるものの心理学では話題となることはまれであった。しかし、最近提唱されている耳鳴の療法であるTRT (Jastreboff & Jastreboff, 2000; Jastreboff & Hazell, 2004) は、耳鳴の起源は蝸牛や聴神経などの末梢系に存在するものの、その認知や評価によって不安が喚起されることにより耳鳴が強化されるという認知的な要因を重視した仮説に基づいて構成されている。そして、耳鳴がわずかだけ聞こえる程度の音量の雑音をある程度連続的に呈示することで耳鳴に慣れるように訓練をし、同時にカウンセリングを行って耳鳴に対する認知の変容を目指し、結果として高い成果を

あげてきている（白石・坂田，2005）．このように耳鳴についても心理的要因、特に認知的な側面が重要な役割を担っていることが明らかとなってきた．

いわゆる空耳、聞き間違いについては病理的な現象ではないこともあり、心理学的な研究の対象にはあまりならなかったようである．そもそも、欧米では日本語の空耳に対応する単語はないのではないと思われる．非言語音については聴覚における錯覚が知られているが、言語音の錯覚では音素復元効果が有名である．

次にこれらの体験を測定する手段であるが、質問紙や半構造化面接が用いられることが多い．質問紙については、幻聴だけでなく幻覚一般の程度を測る質問紙としてLaunay and Slade (1981) が作成したLSHSが用いられることが多い．この質問紙は後にLSHS-R (Bentall & Slade, 1985)として改定され、Waters, Badcock & Maybery (2003) がその構造について主成分分析を用いて分析し、侵入的もしくは鮮明な心的体験、幻視、幻聴の3つの因子からなると報告している．さらに、Morrison, Wells and Northard (2000) はLSHSの項目を再分析し、幻聴と幻視の2因子構造になるように作り変えたLSHSを報告している．しかし、この質問紙は幻聴だけでなく思考や幻視、白昼夢などについて幅広く聞いており、聴覚に限定された幻覚を測定しているとは言いがたい．日本国内においては、幻聴様の体験の頻度を問う質問紙としては丹野・石垣・森本 (1998) が65項目からなる質問紙を作成し報告している．音楽の幻聴については強迫神経症の傾向を測る質問紙であるYale-Brown Obsessive-Compulsive Scaleの中に1項目が含まれているが (Goodman, Price, Rasmussen & Mazure, 1989) 幻聴との関連性を問う形での尺度はないようである．さらに耳鳴りについてはそれに伴う心理的苦痛が特に慢性化した場合に問題となるためその苦痛の度合いを測定するための質問紙が多く作成されている (Hiller & Goebel, 2004) ．しか

し、これらはいずれも苦痛の程度を測定することを目的としており、耳鳴りの知覚的、現象的側面については配慮されていない．

このように無意図的に対応する刺激がないにも関わらず体験される、幻聴、耳鳴、聞き間違いはそれぞれ異なった文脈で研究されてきたが、これらは無関係なのだろうか．いわゆる空耳ということを考えてみた場合、難聴の傾向があれば起こりやすいとも思われるが、一方で幻聴のようにある種のトップダウン的な処理が優勢な人の場合にも体験されやすいかもしれない．また、耳鳴は難聴と強い関係を持つ．このように空耳という現象を中心に考えてみると聴覚において対応する物理的な刺激がない状況で無意図的になされる知覚体験について統合的にモデル化することが可能かもしれない．さらに幻聴の研究においては幻声と聴覚的イメージの間には関連性がないといわれているが、空耳とは関連するのだろうか．このような関心から筆者は幻聴、耳鳴・難聴、聞き間違いの体験の頻度を問う質問紙を作成し調査研究を行ってきた．

岡田(2001a) は18項目からなる空耳質問紙を作成し、大学生に実施し、その結果を因子分析したところ、聞き間違い、幻聴、耳鳴りなどこれまで相互関係が検討されてこなかった現象の間に関連性があることが示唆された．同時に、想像活動への関与 (III ; 笠井・井上, 1992)、特性不安(STAI)、離人感の質問紙を同じ対象者に実施し関連性を検討したところ、空耳質問紙はこの3つの質問紙のそれぞれと有意な相関を示した．岡田(2001b) はこの質問項目をさらに39項目と増やした改訂版を作成し、大学生を対象として実施した．構造の確認と質問項目の信頼性を因子分析、信頼性分析により検討した．その結果、この質問紙は難聴・耳鳴りに関する因子、空耳・聞き間違いの因子、妄想に関する因子の3因子からなることを確認した．これら39項目を用いて信頼性係数 (Cronbachのアルファ係数) を求めたところ0.898となり、これらの現象は概ね一つの次元で考える

ことができることを示した。さらに、非現実感（須永，1996）、聴覚イメージの鮮明性の質問紙を同時に実施したところ、空耳の尺度は非現実感と有意な相関を示すが、聴覚的イメージとは無関連であることを示した。

岡田(2002a)は空耳体験と解離性の尺度であるDES（田辺・小川，1992）自傷体験の頻度（岡田，2002b）との関連性を検討し、これらの体験の間に有意な相関が見られることを見出し、これまで定性的に報告されていたこれらの関係にある程度実証的に把握できる可能性を示した。岡田（2003）は、これらの質問紙を用いた調査をさらに行い、難聴、空耳、幻聴体験と没入性、うつ、創造活動への関与、解離性との関連性を健常な大学生を対象とした調査により検討し、パス解析を用いて簡単なモデル化を試みた。その結果、耳鳴り、幻聴、とりわけ空耳は難聴と関連が深く、これらは解離性や創造活動への関与とも関連性を持つことが示唆された。難聴の原因は聴覚系の器質的問題にあると考えられるが、解離性、没入性、創造活動への関与、うつの4尺度とも関連性を持つことから、日常的な聞こえの悪さは、器質的な問題が中心ではあるものの、心理的な要因もある程度関わっている傾向が読み取れる。幻聴については解離性に難聴や空想活動への関与が加わることによってその頻度がより高まる可能性が示唆された。

さらにこの質問紙を用いて実験的に喚起された幻聴様体験の生起を予測することも可能であった。Merchelbach and van de Ven (2001)、Van de Ven and Merchelbach (2003)らは白色雑音のみを呈示し、その中に楽曲が聞こえるかどうかの判断を求める課題に変えて実験を行った。その結果、音楽が聞こえた（幻聴があった）と報告する対象者はしない対象者と比べると空想傾向、幻聴傾向、統合失調症傾向が有意に高かったが、ロジステック重回帰分析の結果、有意となったものは空想傾向のみであったと報告した。これらの結果から、彼らはこの実験で体験された幻聴は

統合失調症傾向や幻聴傾向とは関係がなく、空想傾向と関連が深いと主張している。そこで、岡田（2004）では、彼らの開発した空想傾向を測るCEQの日本語版（CEQ-J：岡田・松岡・轟，2003）、39項目版の空耳質問紙を同時に実施し、幻聴体験、日常的な聞き間違い体験、主観的な難聴傾向、耳鳴りの頻度などと関連性を持つかどうか調べることを目的とし彼らの実験を追試した。その結果、彼らが報告したよりも高い割合で健常者においても幻聴体験が生起することが確認され、幻聴的な体験は健常者でも普通に起こりうることを示す結果であることが示された。さらに、この課題で実験的に喚起された幻聴は妄想などと関連するような幻聴ではなく、健常者の日常的な体験との関連性が明らかとなった。さらに、難聴や耳鳴りの尺度とも関連性を持たないことから聴覚系の器質的な問題も関わらないことが示唆される。今回の実験によって喚起された幻聴は病理的現象を含む可能性は否定できないが、むしろ、健常人でも条件さえ整えば誰にでも起こりうる現象であることを示唆するものであった。

岡田(2004)の研究の手続きでは「先ほどかかっていた音楽が聞こえるかもしれない。」という教示が含まれているが、この教示は暗示的な効果を持っており、それが幻聴的な体験の報告を引き起こした可能性が考えられた。そこで、岡田(2005)はこのような暗示的な教示がある条件とない条件を設定して先の研究と同様の実験を実施し、暗示的教示が与える効果について検討した。その結果、暗示的教示を行った群においては、岡田（2004）と同様の結果を得たが、非暗示群においても声が聞こえたという対象者に限って幻聴の尺度得点が低くなったことから、暗示的教示はせずに白色雑音を提示したときに人の声が聞こえたかどうか幻聴の傾向を予測する重要な指標となることを示唆された。

本研究ではこれまで用いてきた空耳質問紙の短縮版を作成し、うつ傾向、想像活動への

関与、解離傾向を同時に測定し関連性を検討したので報告する。

結 果

方 法

対象者 心理学関連の授業を受講している大学生469人（男性61人、女性408人）。平均年齢19.93歳、標準偏差1.14歳（18歳～29歳）。

質問紙

空耳質問紙は実際に音は呈示されていないにもかかわらず、音が聞こえたことがあるという体験について、主に精神医学に関する文献や学生への面接を経て39項目からなる。この項目のそれぞれについて過去1年間の間の体験頻度を、「いつもある」を1、「時々ある」を2、「めったにない」を3、「1回くらいはある」を4、「全くない」を5とする5段階評定が求められた。同じ対象者に対してうつ傾向を測定するBDI（林，1988）、想像活動への関与を測定するIII（笠井・井上，1993）、解離傾向を測定するDES-（田辺・小川，1992）も実施した。

手続き

質問紙は心理学の授業の一環として1回の授業で1質問紙ずつ4回に分けて配布しその場での評定を求めた。各質問紙を完了するためにかかった時間はそれぞれ10分程度であった。

表2に39項目の総和の間の相関係数と、その項目が除去された場合の係数を示す。39項目のCronbachの信頼性係数は $\alpha = 0.896$ であり39項目の内的整合性は確保されていることが明らかとなった。さらに、質問紙の構造を調べる目的で主成分分析を行った。その結果固有値1の基準では11の主成分が抽出され、説明率は60.4%となった。スクリープロットによって抽出すべき成分数を検討したところ3成分が妥当であると判断された。そこで、3成分解を求め、Varmax回転を行った。回転前の寄与率は第1主成分が23.3%（固有値8.70）、第2主成分が7.52%（2.93）、第3主成分は4.87%（1.89）であった。

回転後の主成分負荷量を見てみると、主成分負荷量がどの因子に対しても低い項目、複数の成分に負荷量が高い項目があったことから、もともと主成分負荷量が0.35以下の項目、複数の因子に主成分負荷量が高い項目を除くこととした。その結果、24項目が残った。39項目版では耳鳴りに関する項目が4項目含まれていたが、今回の分析の結果そのうちの3項目は削除され、独自の因子を構成することはなくなった。24項目について再度、主成分分析を行って3成分解を求め、Varimax回転を行った。その結果を表2に示す。

表2 の因子分析の結果得られた因子負荷量と信頼性分析の結果
網掛けは因子負荷量0.3以上の項目

項 目	幻聴	難聴	聞き間違い	共通性	平均	標準偏差	総和との相関
38 周りに誰もいないのに、自分のことを非難したり、侮辱する声が聞こえる。	0.784	0.010	0.052	0.618	4.709	0.767	0.508
31 性別はよくわからないが、頭の中で人の声が聞こえる。	0.699	0.075	0.127	0.510	4.563	0.887	0.513
36 ラジオの雑音や、自分にとって意味のある言葉に聞こえる。	0.681	0.155	0.047	0.490	4.706	0.713	0.502
35 街中で見知らぬ人が自分のことをうわさする声が聞こえる。	0.662	0.097	0.056	0.450	4.411	0.954	0.471

34	水槽の「ブクブク」という空気音が人の話し声に聞こえる。	0.642	0.036	0.137	0.432	4.733	0.643	0.461
32	テレビやラジオの放送がないときに聞こえる雑音の中に人の声が聞こえる。	0.633	0.174	0.169	0.460	4.559	0.859	0.541
21	街中で見知らぬ人が自分のことを非難する声が聞こえる。	0.597	0.130	0.058	0.377	4.238	1.046	0.453
26	人と話をしている時、相手の口には出さない本音や心の中で思っていることが聞こえる。	0.585	-0.110	0.072	0.360	4.470	0.979	0.323
37	耳元で低くうなるような音が聞こえる	0.547	0.112	0.131	0.329	4.497	0.887	0.422
20	水道管を流れる水の音が人の話し声に聞こえる。	0.542	0.068	0.150	0.321	4.536	0.848	0.415
39	寝床に入ってうとうとしているときにそこではしないはずの人の声や物音が聞こえる。	0.522	0.099	0.117	0.297	4.355	1.056	0.399
28	ラジオやテレビで自分の名前や住所などが放送されるのが聞こえる。	0.510	-0.039	0.027	0.262	4.839	0.582	0.293
4	友人や親などから聞き間違いが多いと言われる。	0.085	0.785	0.061	0.628	2.382	1.145	0.427
19	話し掛けられた言葉が聞き取りにくく、聞き返すことがある。	-0.004	0.725	0.026	0.526	1.980	0.898	0.325
13	友人などから耳が遠いのではないと言われる。	0.105	0.698	0.087	0.506	3.375	1.331	0.401
10	「ところでこのコーラどうして何の味もしないのかい」「ところでこの子はどうして何の味もしないのかい」のような聞き間違いがある。	0.124	0.623	-0.036	0.405	2.631	1.251	0.317
3	男性の低い声が聞き取りにくい。	0.022	0.501	0.096	0.261	2.987	1.241	0.256
25	物事に没頭していて声をかけられても気づかないことがある。	0.046	0.477	0.128	0.246	2.554	1.068	0.277
15	CMソングや街中でかかっている音楽など、特定の曲が耳について離れない。	0.061	0.434	0.156	0.217	1.932	0.876	0.282
16	シャワーを浴びている時、電話の呼び出し音が聞こえる。	0.038	0.063	0.857	0.740	3.627	1.347	0.378
9	お風呂に入っている時、電話の呼び出し音が聞こえる。	0.016	0.122	0.835	0.712	3.439	1.377	0.383
6	騒音がひどい所で、誰かに話し掛けられる声が聞こえる。	0.261	0.167	0.549	0.398	3.669	1.137	0.450
7	人と一緒に街中を歩いている時、誰かに名前を呼ばれる声が聞こえる。	0.197	0.225	0.499	0.339	3.466	1.151	0.417
1	1人でいてヘッドホンやイヤホンで音楽を聴いている時、誰かに話し掛けられる声が聞こえる。	0.247	0.021	0.423	0.240	3.852	1.323	0.314
固 有 値		4.85	2.91	2.36				
寄 与 率(%)		20.22	12.13	9.83				
		0.855	0.731	0.708				

3成分分解の寄与率は合計で42.2%となった。第一主成分に負荷量が高かった項目を見ると幻聴に関する項目が集まっていることから、この成分を幻聴と呼ぶ。この成分に属する項目は12項目となった。第2主成分に負荷量が高かった7項目は聞き取りの悪さに関する項目と考えられることからこの成分を難聴と呼ぶ。第3主成分は5項目からなり、聞き間違いと呼ぶ。表2にはさらに各項目の平均値と標準偏差を示す。幻聴成分に属する項目群は全て平均値が高く体験する傾向が低いことがわかる。それに対して難聴の成分に属する項目群の平均値はやや低く体験頻度がやや高いことがわかる。聞き間違いはその間くらいにある。

24項目全体についてCronbachの信頼性係数を求めたところ $\alpha = 0.836$ と十分な値となった。さらに、3成分のそれぞれに属する項目を下位尺度と考えそれぞれの下位尺度について信頼性係数を求めた結果を表2に示す。幻聴尺度については十分に高い値であったが、難聴と聞き間違いの尺度についてはやや低い。後者については項目数が少ないことを考えれば妥当な値であると考えられる。

表3 24項目全体と各下位尺度の統計量

	24項目	幻聴	難聴	聞き間違い
最小値	51	28	8	7
最大値	116	55	35	25
平均値	90.828	50.057	17.837	18.040
標準偏差	11.405	5.907	4.880	4.316
歪度	-0.640	-1.641	0.366	-0.184
標準誤差	0.115	0.115	0.115	0.115
尖度	0.359	2.300	-0.031	-0.941
標準誤差	0.229	0.229	0.229	0.229

24項目全体と3つの下位尺度の基礎統計量を表3に示す。全体では歪度がやや低い傾向が見られる。これは幻聴の下位尺度の歪度が低いためであると考えられる。幻聴の下位尺度に属する項目はいずれも表2に示すように体験頻度が低いいためその総和を算出した場

合、頻度が最も低い、すなわち合計が最も高いクラスの頻度が最も高くなるためである。24項目の総和と3つの下位尺度について平均値に性差があるかどうかを確かめる目的でt検定を行った。その結果、難聴の下位尺度についてのみ、女性のほうが頻度が高い傾向(男性:平均値19.73(n=60)、女性17.60(n=409))が有意であった($t(467)=3.18, p<.01$)。

表4に24項目と各下位尺度間の相関係数を示す。相関係数はすべて1%水準で有意であった。24項目の総和と下位尺度の間の相関は十分に高い。3つの下位尺度の間の相関は有意ではあるがそれほど高くはないことがある。

表4 24項目の総和と各下位尺度間の相関

		24項目総和	幻聴	難聴
幻	聴	0.782		
難	聴	0.660	0.215	
聞き	間違い	0.702	0.347	0.288

表5に空耳質問紙24項目の総和と3つの下位尺度とBDI、解離尺度、IIIとの相関係数を示す。対象者数が異なるが、これは、授業の欠席等があったためである。

表5 空耳質問紙24項目の総和、下位尺度とBDI、解離尺度、IIIとの相関 nは対象者数

	BDI	解離	III
空耳24	-0.233	-0.344	-0.330
n	381	388	354
幻聴	-0.197	-0.345	-0.282
n	380	387	353
難聴	-0.171	-0.213	-0.226
n	381	388	354
間違い	-0.140	-0.174	-0.224
n	381	388	354

空耳尺度は3つの質問紙のすべてと有意な相関を示す。相関係数は負であるがこれは空耳尺度の頻度が高いほど評定値が低くなるよ

うになっているからで、空耳の頻度が高いほど各尺度の傾向が高いことを示している。特に解離傾向と空耳の中でも幻聴の間の相関が明瞭である。難聴や聞き間違いの下位尺度も3つの質問紙と有意な相関を示すものの、その値は必ずしも高いわけではないので、関連性は弱いといえよう。

考 察

39項目版についての信頼性分析の結果、高い内的整合性が確認できた。これは、対応する刺激がないにも関わらず無意図的に体験される幻聴、耳鳴、聞き間違いといった体験が互いにある程度の関連性を持つことを示唆するものである。今回の分析では検討できなかったが、器質的な難聴が基礎となり耳鳴や音楽の幻聴が起こることが、この関連性を支えるメカニズムの一つであることが推測される。また、これまではあまり検討されてこなかったが、幻声と耳鳴や難聴の間にも関連性が見られることから、幻声の体験メカニズムについて考える際には高次の認知的な機制だけでなく、統合失調症患者を対象にした聴覚的なマスキングの実験などから示唆されるように（例えば Källstrand, Montnémy, Nielzén, & Olsson, 2002）感覚レベルにさかのぼったボトムアップのメカニズムについても考慮が必要であることを示唆するものである。一方、最近 Waters, Badcock, Michie, & Maybery (2006) は幻聴の発生について侵入的思考と記憶の障害を中核に据えたモデルを提唱している。このモデルでは触れられていないが、このモデルは音楽性の幻聴にも適応可能であり注目に値する。今回扱った幻聴、耳鳴、聞き間違いの関連性を考える上でもこのようなより高次のメカニズムの介在についても検討する必要もあると考えられる。

この質問紙で取り扱う難聴については注意の必要がある。この質問紙では難聴については主観的体験を問うものであって、その結果のすべてが感覚器官の器質的障害に由来する

わけではない可能性があるからである。IIIと有意な相関が見られたが、これは主観的体験に没入することで周りのことが聞こえなくなるという形での難聴体験が関連することを示しており、この場合は必ずしも器質的な障害とは関わりなく、むしろ中枢系の関与、例えば統合失調症患者についての研究で DiGirolamo & Posener (1996) が示唆しているように注意の機制が関わることも予想される。

本稿では24項目の短縮版の作成を行った。その結果、幻聴、難聴、聞き間違いの3因子構造にこれらの現象が集約されることが示され、耳鳴については対応する項目が1項目となってしまった。これは耳鳴が難聴と強く関連するというメカニズムが主観的な評定にも反映された結果であると考えられる。3つの因子から3つの下位尺度を構成したが、その中でも幻聴の下位尺度は解離尺度とIIIの双方とある程度の関連性を持つことが確認された。これは、幻聴が病理的な現象と同時に想像や空想体験とも関連することを示唆するものである。特にこの下位尺度は幻聴に限定された尺度であり、既存の尺度よりはきめ細かく幻聴、特に幻声の研究に応用が可能ではないと思われる。

本稿は日本イメージ心理学会第6回大会で発表した内容に加筆修正を加えたものであり、平成17年度文教大学人間科学部共同研究費（研究代表者：岡田 斉）の補助を受けた研究である。

引用文献

- Ali, J. A. 2002 Musical hallucinations and deafness: a case report and review of the literature. *Neuropsychiatry, Neuropsychology, and Behavioral Neurology*, 15, 66-70.
- Assad, G. 1990 *Hallucination in Clinical Psychiatry. A Guide for Mental Health Professionals*. New York: Brunner/Mazel. 2004 工藤行夫『幻覚の臨床』金剛出版)
- Barret, T. R. & Etheridge, J. B. 1992 Verbal

- hallucinations in normals, : People who hear 'Voices'. *Applied Cognitive Psychology*, 6, 379-387.
- Bentall, R. P. & Slade, P. D. 1985 Reliability of a scale measuring disposition toward hallucination: a brief report. *Personality and Individual Differences*, 6, 527-529.
- Berrios, G. E. 1990 Musical hallucinations – a historical and clinical study. *British Journal of Psychiatry*, 156, 188-194.
- DiGirolamo, G. J., & Posener, M. I. 1996 Attention and schizophrenia: A view from cognitive neuroscience. *Cognitive Neuropsychiatry*, 1, 95-102.
- Goodman, W. K. Price, L. H. Rasmussen, S. A., & Mazure, C. 1989 The Yale-Brown Obsessive Compulsive Scale: I. Development, use, and reliability. *Archives of General Psychiatry*, 46, 1006-1011.
- 林 潔 1988 「Beckの認知療法を基にした学生の抑うつについての処置」『学生相談研究』9, 97-107.
- Hermesh, H., Konas, S., Shiloh, R., Dar, R., Marom, S., Weizman, A., & Gross-Isseroff, R. 2004 Musical hallucinations: prevalence in psychotic and nonpsychotic outpatients. *Journal of Clinical Psychiatry*, 65, 191-197.
- Hiller, W & Goebel, G. 2004 Rapid assessment of tinnitus-related psychological distress using the mini-TQ. *International Journal of Audiology*, 43, 600-604.
- 菱谷晋介編著 2001 『イメージの世界』 ナカニシヤ出版 .
- Jastreboff, P. J. & Jastreboff, M. M. 2000 Tinnitus retraining therapy (TRT) as a method for treatment of tinnitus and hyperacusis patients. *Journal of the American Academy of Audiology*, 11, 162-177.
- Jastreboff, P. J. & Hazell, J. W. P. 2004 *Tinnitus Retraining Therapy. Implementing the Neurophysiological Model*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 笠井 仁・井上忠典 1993 「想像活動への関与に関する研究：測定尺度の作成と妥当性の検討」『催眠学研究』38, 9-20.
- Källstrand, J., Montnémy, P., Nielzén, S., & Olsson, O. 2002 Auditory masking experiments in schizophrenia. *Psychiatric Research*, 113, 115-125.
- Keshavan, M. S., David, A. S., Striengel, S., & Lishman, W.A. 1992 Musical hallucinations : a review and synthesis, *Neuropsychiatry, Neuropsychology, and Behavioral Neurology*, 5, 211-223.
- Launay, B. & Slade, P. D. 1981 The measurement of hallucinatory predisposition in male and female prisoners. *Personality and Individual Differences*, 2, 221-234.
- Merckelbach, H. and Van de Ven, V. 2001 Another white christmas: fantasy proneness and reports of 'hallucinatory experiences' in undergraduate students. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 32, 137-144.
- Miller, T. C. & Crosby, T. W. 1979 Musical hallucinations in a deaf elderly patient. *Annals of Neurology*, 5, 301-302.
- Morrison, A. P., Wells, A., & Nothard, S. 2000 Cognitive factors in predisposition to auditory and visual hallucinations. *British Journal of Clinical Psychology*, 39, 67-78.
- 岡田 斉 2001a 「空耳体験に関する質問紙調査 1 空耳体験質問紙作成の試み」『東北心理学研究』51, 86.
- 岡田 斉 2001b 「空耳体験に関する質問紙調査 2 空耳・耳鳴り・幻聴体験と非現実感・聴覚的イメージの鮮明性との関係」『日本心理学会第65回大会発表論文集』1031 .
- 岡田 斉 2002a 「空耳体験に関する質問紙調査3 空耳・耳鳴り・幻聴体験と解離性・自傷体験との関係」『日本心理学会第66回大会発表論文集』267 .
- 岡田 斉 2002b 「自傷行為に関する質問紙作成の試み」『人間科学研究』24, 79-95.
- 岡田 斉 2003 「空耳体験に関する質問紙調査 4 空耳・耳鳴り・幻聴体験と没入性・うつ・解離との関係」『日本心理学会第67回大会発表論文集』265 .
- 岡田 斉 2004 「空想傾向と幻聴の関連性 White Christmas test を用いた検討」『東北心理学研究』54, 13.
- 岡田 斉・松岡和生・轟 知佳 2004 「質問紙による空想傾向の測定 Creative Experience Questionnaire日本語版CEQ-Jの作成」『人間科学研究』26, 153-161.
- Posey, T. B. & Losch, M. E. 1983 Auditory hallucinations of hearing voices in 375 normal subjects. *Imagination, Cognition and Personality*,

- 2, 99-113.
- Reisberg, D. Eds. 1992 *Auditory imagery*. Hillsdale, N.J: Lawrence Erlbaum Association.
- 白石君男・坂田俊文 2005 「耳鳴の科学」『日本音響学会誌』61, 708-713.
- Slade, P. D. & Bentall, R. P. 1988 *Sensory deception: A Scientific analysis of hallucination*. London: Croom Helm.
- 須永範明 1996 「非現実感質問紙の作成」『心理学研究』67, 86-93.
- 小学館日本語大辞典 1976
- 田辺 肇・小川俊樹 1992 「質問紙による解離性体験の測定 大学生を対象とした DESdissociative experience scaleの検討」『筑波大学心理学研究』14, 171-178.
- 丹野義彦・石垣琢磨・森本幸子 1998 「健常者の幻聴様体験を調べる質問紙の作成」『日本健康心理学会第11回大会発表論文集』96-97.
- Tien, A. Y. 1991 Distribution of hallucinations in the population. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 26, 287-292.
- Van de Ven, V. &Merckelbach, H. 2003 The role of schizotypy, mental imagery, and fantasy proneness in hallucinatory reports of undergraduate students. *Personality and Individual Differences*, 35, 889-896.
- Waters, F. A. V. , Badcock, J. C., & Maybery, M .T. 2003 Revision of the factor structure of the Launay - Slade Hallucination Scale LSHS-R. *Personality and Individual Differences*, 35, 1351-1357.
- Waters, F. A. , Badcock, J. C., Michie, P. T., & Maybery M. T. 2006 Auditory hallucinations in schizophrenia: Intrusive thoughts and forgotten memories. *Cognitive Neuropsychiatry*, 11, 65-83.